『桃山学院大学学生論集』第30号の発刊によせて

学長　前　田　徹　生

学生懸賞論文，学生研究発表大会に参加され，見事入賞を果たした皆さん，おめでとうございます。

今回の『学生論集』は第30号となりますが，その前身は1966年２月に発刊された『経済学論集別巻学生論文集』に遡ります。歴史的にも，実施面でも他大学に誇ることができる教育プログラムといえるでしょう。この度の論文の応募本数は54編となり，残念ながら昨年度の77編から大きく減少しました。しかし，応募された論文はどれも力のこもった論文で，選外になった作品にも高く評価できるものが少なくなかったと聞いております。所属ゼミ・テーマで分類した学部別の投稿件数は，経済25編，社会13編，経営４編，国際教養12編となり，法学部からの投稿はありませんでした。法学という学問のむずかしさ，その他の事情が反映されたものと推測されます。

さて，審査結果ですが，残念ながら学長特別賞および優秀作の該当はなく，佳作３編，準佳作２編という結果でした。取り上げられたテーマですが，これはのちに述べる学生研究発表大会と同様に，日中関係，大阪の経済・金融問題，自治体の合併や財政に関する問題等，国際情勢，社会情勢を強く反映したテーマが多く見られました。

つぎに，学生研究発表大会では，参加グループ数こそ昨年度より減少したものの，参加人数では前年度の196名を上回り209名となり，４会場で46個人・グループの発表が行われました。その結果，最優秀賞１名，優秀賞３グループ，佳作４グループ，準佳作12個人・グループが表彰されました。学生研究発表大会は，年々規模が大きくなり，昨年度から予選と本選の二段階審査方式をとるようになりました。こうして年々参加者が増え，大会が盛会になるのも，勉学に対する学生諸君の熱意，指導する先生方の熱意の表れであ

り，大変心強い思いがいたします。

論文を書き上げたり，それを発表したりと，アウト・プットすることは，今日よく言われる「アクティブ・ラーニング」の一種となります。「アクティブ・ラーニング」は，従来のイン・プット中心の教育を越えて教育効果の高い方法であると考えられています。学生が主体となることにより，学びが楽しくなり，「脳」も開かれて発達を促し，さらには社会人として求められる汎用的能力や「考える力」も養われます。本学でも，こうした教育手法を積極的に取り入れて，高い能力をもった元気な学生を育てて行きたいと思います。

最後になりましたが，学生懸賞論文，学生研究発表大会の準備，運営にご尽力された教員ならびに職員の方々に，改めて感謝の言葉を申し上げます。

2015年１月30日